倭訓栞中編 計之部 七

和書門
類
二一六五一號
八口函
一架
八二冊

内閣文庫
和書
類
二一六五一號
八二冊
二六函
四架

内閣文庫
番號 和 21651
冊數 82 (41)
函號 263 10

国立公文書館
National Archives of Japan

倭訓栞中編巻之七

計の部

洞津　谷川士清纂

けいご　警固　こゝろ禁中にて人とある付ふ行ふる事也

けいつ　系圖　こゝろ書法ゝ朱と引ゝ墨と引あり又寸法あゝて男子とゝふ記ゝ女子ハ无ゝ如ゝ名をゝふ書ぬもゝのゝゝ

けいご　今賀茂の社ふゝゝ世二社註式ゝ欽明廿八年天下風雨ゝて于時ゝ部住吉若日子ふ勅命ゝて今ゝ賀茂神の祟也四月中と撰ゝ祀ゝ馬ゝ鈴とかけ人猪の影と蒙て駈馳ゝて以て祭祀と爲て待祀ゝ也ゝ乘馬此ゝ始まゝゝゝゝ

けいだい　城南寺競馬ゝ城南寺ハ鳥羽院離ふの趾竹田ゝゝゝ

境内の音也古ゝ四至ゝゝて四方の境ゝゝ也今ゝ

民姓ゝも四至内ゝゝ

けいしん　桂心とあり八種唐菓子の内也○桂心ハ肉桂の肉にてかちなるもの也

けいめい　物語にけいめいしてつかふるハ敬命の義也と源語類聚にみえたり建武年中行事に使まうけ出立ちなどけいめいいそめりといへり一説に経営なりといへり

けいせい　漢書に一顧傾人城再顧傾人国とみえたり後にハ傾國ともいひて我邦娼家の称となれり海東諸国記にもつかへり武平一が詩に常矜絶代色復恃傾城姿とみえたり○源平乱の後平家の侍女等下の関門司関赤間関などにさまよひせしするたつきもなくされハあそび女となりしともいへり○攝州播州等の神社乃祭祀に妓女を用ることあり楊升菴が集に漢郊祀志祭郊時宗廟用為飾女妓今之装且也其褻神甚矣とみえたり

けいせち　磬折の義礼の注に倭折如磬之背也とみえたり

けいひち　警蹕也東漢記に王者至尊出入則警蹕而行とみえたり

けいくつ　磬屈とあり磬折してかゞむ也

けいびやく　啓白とあり経文の小口をかりかたよむ義也といへり○俗説についしやうけいそくといふも追従啓白なるべし軽薄にいへりし

げいじゆつ　藝術也後漢書の注に藝謂書数射御術謂醫方卜筮とみえたり

けいぐわい　経廻の音也康富記東鑑などにみえたり

△けうど　霊異記に鋪とよめり食人の義にや

○げかう　常に下向とあり鎌倉右大将家に還向とみえたり

けうち　西州の俗語飢渇の音也

△げぎよ　建武年中行事に御輿神嘉殿の南向の壇によせまけられしこそ下御神嘉殿のひさしより入らせさせますに注に八脚の如しとみえたり

げきりん　韓非子に人主亦有逆鱗とみえたり

げきやう　俗に外科と外痤といふ字林拾芥に見えたり

げぎやう　現形の音也其名保勢加波ゆゑに見えたりとかれとかり

りれてこゝに形字は禮字の誤寫なるべし

げくきやう　朝鮮慶尚道の音也

△げぐ　源氏に見る今俗にいふ泡也異にして同也

けぐうあんぎい　計較安排と云ふ禪錄に見る

△けこ　酒のまぬものを下戸といふ上戸と民戸とは同

こんこんの上戸の下まくら

○けさ　人の昔如保ふ粧とあり今も京都ふけさの有無と

平語にいふ

けさ　懸想と云ふ字梵語に見る懸念のきこなるべし

けさう　けさは艶なといふ也○假粧の義也ふ新猿楽記に乳裝とも見えたり

○源氏に化生もさもう又けさうにんともいふ

けさん　松浦紙にけさんと見えたり界筭とも云ふ界と川の

筭木也そけいさんともいふ也所謂壓尺也といふ遵生八牋に

倭の壓尺の細緻と評せり

げさい　解齋の義也祭にそなはるものなり

げざん　右京大夫家集に女房にげざんせよやきこえ

こゝろ源氏に見参と云ふ見在に参仕する人といふ朝廷に

伺公乃交名と記せり帳面と云ふ如しといふ

けざい　国朝典彙に熟知磺脉者為磺夫とこゝろ磺又礦

に似るまぶのり也天工開物に採礦といふ○かのもりは吳社編に淘

金戸也といふ

△げー　庭訓に下司郷司とこゝに下司は奉行の被官也といふ

けき　伊勢物語にけきはいかゝ

この義也同出及源氏にけきはいかゝ

さとゞめし下衆らとといふいかゞ

けーのう　源氏にも芥子丸香也護摩供といふ蜻蛉日記にけし

やきともいつる麁怨なくと降伏するハ白芥子なく用ゝとゝいつ
けーしてむ　事ゝなくして障礙あるとゝいへハ其事を消ーなるゝ
とゝなるべし俗語也
けーぶみ　焼炭とゝあり樂天の詩ゝ麩炭ゝもゝ
けちゝ　源氏ゝゝけんせゝも同ー顕證也ゝいつる陳なり
俗ゝ尤旁知狀謂ゝ見證ゝなゝ
けちゝ　化生のゝゝいつる○ゝ字伊勢物語ゝ假相ゝもゝ
女の身代かぎるゝいゝ万葉集ゝ
るなくハ何ゝかゝゝんくしけかるはけの小櫛もとゝめゝもゝ
げーしん　唐律ゝ下手人とゝえゝなり字ゝ如く相手の内ゝて
始てゝとおるゝ又重ゝと負せるゝ人といつる或ハ鮮死人とゝえゝなり
げーや　俗ゝげちゝ　げーげーなゝいハ外借腹の義也ゝいつる
庶孽といゝ也
けーかーず　惟ーかるゝもの義ゝいるゝ也さゝハけしかるの反

語なるゝ　けもゝ惟ーかるゝ惟ーかるゝ同一ゝ也此格古語ゝも俗
形ゝも多ーけーきあるハ源氏ゝゝ
△けぎ　下衆の音也袋草紙中原範政ゝ子ゝもゝあり明月
記ゝ下衆猿樂ゝ侍猿樂ゝ対揚ゝいつる又下司也上官ゝ
対せゝ辞也ゝいつる
げもゝ　下水の音也○げもゝ下水板也
△けぎゝ　源氏ゝゝ禁秘抄ゝ華足ゝゝえゝなり臺の足代
形ゝもゝもゝいゝ也ゝ○今佛お霊前ゝ公卿の小きあと用
ゐ名と同ーゝ官家ハ平生用ゐらるゝ也○本願寺ハもゝ
とけもゝ移ー其器ハくげゝいゝ供笥の義ゝ
○げた　江戸ゝ木屐といゝ芥下板ゝや又殿沓の音ゝや或ゝ
下駄の音ゝや○草履げゝハ舄也木底ハ舄ゝゝえゝなりこはげゝ
小間げゝぬゝし
げだち　盛裏記ゝけだちゝる飯ゝゝいきれのがゝといゝ乾

發の字也

けたい　外題とかけり簽といふ也

けさを色て　消さる字也といふ

けさかり　氣高の字なり（し）

△けぢらき　氣近の字也といふ

けちえん　添ぎけちえんなるべきとうん〻とり掲焉の音

あしかるる火影といふ也　○雞距といふ蹶爪の字也

○けづめ　俗に言と多くいひりてり付て却て字を忘しいふ

けつく　辨慶狀東鑑などに結句とかきり詩なるの結句のことを也とて平戸

記の修明門院（盗人の入る處に結句奉剥仙院とかるハ通俗なげ

くのたてかるいふ同じ俗にけりとて此字なるハむとひ句

けいつり

けつげ　結解とかる名結ハ筭と入て数と置ちる也解ハ筭用行

つて其理とこゝろを也庭訓に田所結解勘定とかる名勘定ハ筭用

のとして未進過上と勘（定む）る也

けつこう　結搆とかけり人物て美麗精緻盛事安堵の

けつぞん　周巡の字也建武年中行事に四献のことびさうつ

けつぞん　さてぞつゝけつぞんとのまゝむとうんかり

けつまる　闕所とかり功田賜田なるを拾る人の罪とかるひ

けつまづく　亡ひて其田の主ゆ〻ゆるかるを代とも也とうれて今人家沈没

△けも　收とかるを也西土に籍收とかり

○けかいど　跌とかるを也

けかるゝ　万葉に行けどもあるハけもとも也

旅とりそく　其氣のかき人とかの俗称也

俗に美嵩のことをけかるハ勝ると人間

起てみんと思ひしかとも消にやうこ露ならけなる朝がほの花

けなしもぎ　あさふりて足草さん不也といへり

けなハけぬべし　消なハ消ぬべくといふ也

△げん　外任也外官といふに同し諸国司の任也○禅閤抄に

外任奏ハ諸国守介等未給或雖給任符未赴任或為済権政入來者朝

参預節會者註名以奏聞之名也

けふくし　氣悪き義也人なくしも同じ也

けよつぷうつ　阿蘭陀の小刀也刃と鞘の内に入つまゝ出るを付ハ

さや即柄となる其刃鋭利也

△けのくつ　倭名鈔に靴とよめりけハ靴の音也通鑑の注に靴ハ

胡履也とみえたり

○けそれ　俗にけそれてあらぬといへり褻の時晴の時なりと

記録にみえたりそれハ法例の音也後日年紀に一日法例とみえたるハ

今いふ一日だれの義也といへり今も車馬衣服に就ていへり○装束

略抄に褻ハ法例ともかくて平生のことをもいふめぬ中なるべし以て晴褻

尋常と云にあたるべしとみえたり

けだれ　毛たれの義裾に垂れし毛の義とみえたり

けちがし　門にいふ閾也○舟にてハ蹴上といふ

けちびかしハ　女官式中宮御粧粕といへり櫛笥の名といふ

ならしといへり

げちょうがしら　人の枯骨をいひて蟲となる也外法頭の義なる

べし續夷堅志にいふ髑髏神也といへり縣丞の懐中をいふ後ろ

佛も同じ義なるべし

△けひき　工匠の具に界引あり

けひど　競人の義関東言也けハきほひ反ことを略してけひとなる也

けびゐし　検非違使也又曰使廳天長七年始置此局とみえたり○

位署とかくにハ此職号をかきて云流例也といへり○廳宣ハ別當宣也

違背廳宣者ハ可准違勅とみえたり○廷尉ていふ称号紙とい

やしげなるとのけびのしれたかなしくえたり

△げふ　噯氣をいへりげつぷともいへり其聲をもて名とすへし

けぶたし　倭名抄に嬶とあり煙痛の義也といへりけむたし
も同し唐韻に嬶烟氣也と見えたり

けぶらひ　らひ反てあれハけぶりとなれり約せし詞なへし俗語也

けふそく　後撰集によめり倭名抄に脇息とあり凡属所出未詳
とみえたり戦国策の注に墨子曰楚霊王好士細腰故其臣皆
三飯為節脇息而後帯揃擂而後起とし脇息の字此義によれるなるへしとの
見へし東鑑新猿楽記には脇足とあり憑几是也

げふぐし　業ぐしき見へし文選に業ぐ読たりしとあり

けぶりぐさ　煙草の義近き世の俗制なり

蛍のもゆ浦なともけぶりなどいふ也居に人のしわざとこそあれ

けぶりきり　煙桐の義琴の名也こハ字佛抄ようなるなり蔡邕か
焦尾琴よりも出たる名なるへし

けぶりのまゆ　煙眉也美しきをいふといへり

けふもかりなり　行平朝臣の哥に見ゆ今日もかりに今日者狩
ともいへり也後撰集にハかりとそ明かつゝたることもある八雁といひ入
たる也

けふドのぼさつ　源氏にも見ゆ日本紀に挟持菩薩とみえたり俗に
まきたちといふ也　万葉集に脇挟持ともあり庭訓に脇仕と作る

△けまん　花鬘とかけり梵語に出たる或ハ生花を用ゐ或ハ花勝を
用ゆる○けまん草ハその形によりて名く荷包牡丹也○げまんハ桃朱
術也芡げまんハ黄芩也○けまん結びハ同心結也

○けん　語末の詞にいふ疑ふの意旨なりといへり神代紀に
憚てけんとよめりけんハ反ぐ也かくれんといふに同し我あり人にことの
ほけん海の縁といつまたかけんなど見えたり萬葉集に疑字をよめり
○人の氣象をいふ権柄の義なり慳貪の義なり○験よりいふハ間字
なや或ハ景音の転訛なりといへり○間よりいふハ挙字をあて唐山にて

枴拳とゝ古の梅陳也とゝ又打拳とも云五雜俎ゝ手勢今とゝ
りゝも同し今唱ゝる石のすゝゝちえきを爲ゝ教員も唐音
せとゝ○源氏ゝ券と音とゝ法券放券ゝ云
○道路の間數ゝゝ六尺とりて一間とゝ六十間と一町とゝ
如ゝ

けんぞ　源氏ゝ云也見證也とゝけんをゝとゝ
けんち　檢地とゝ○けんぞと引けんゝども檢字とゝ多ゝハ
間とゝ
けんみ　檢ゝとゝ
げんゝや　驗ゝ也扨ゝ多ゝ祈禱ゝの効驗ゝとゝ
けんちゝ　絹紬とゝ織物の名也
けんゝと　喧嘩とゝ嘩ハ譁ゝ同ゝ
げんさい　浪華尾州ゝ人の妻とゝ罵ゝ須ゝや左傳ゝ有仍妥
髪眞黒而光可以鑑名云玄妻とゝ也○紀州ゝ草嫁ゝ云幻妻

とゝ四国ゝ云八見短とゝ
けんぞん　建盞とゝ茶盌ゝ云
ゝ始め建暦の比ゝとりて呼ゝや或ハ建安ゝ制ゝ出ゝ茶
盞也とゝ○乾山八尾形氏近世の人也
けんま　伊勢ゝ人の加ゝつゝ云也とゝ仕法ゝ
ハれひゝしきとゝ或嶮驚の字と用ゝ
けんぎょ　懸魚とゝ顔ゝ推ゝ詩ゝ縣魚張憲ゝ詩ゝ卷
魚ゝ似ゝ留青日札ゝ博風板尖下所垂ゝ物也とゝ辨色立成ゝ屋
背桁端懸板名也とゝ
げんゝん　燕翼ゝ見任人不別給告とゝ云
げんかん　阮咸とゝ樂器とゝ云此人の造りしゝや琵琶の其
頭不曲者也とゝ和名抄とゝ云
けんぞい　見敗とゝ又欠敗とゝ
ぞいとゝ七里とゝ金色孔雀経の首ゝ七里結界金剛

宅收汝百鬼項着枷安宅神咒結界咒文に大神龍王七里結界金剛宅といへる悪魔を拂ふ咒文に見敗〻とあり推古紀に見える厩戸皇子の將無見敗非願雖成の語に據らるかし 荒神咒に唵欠敗欠敗莎波娑賀といへるなり〇伊勢神宮の人罪人と称する所称してちりけんざいといふも訛言也〇勸盃の音にもいへり

けんどん　慳貪の字梵語なりといへり〇旅店の麪類をいふは儉飩也といへり

けんぽふ　憲法とあり弘仁格序に上宮太子親作憲法十七箇條国家制法自茲始焉といへり〇又拳法也染色にいふは洛の染匠吉岡又三郎に始るといふ

けんだん　檢断とあり事に臨んて理非を檢按し善悪を決断するをいふ也東鑑に守護檢断地頭といへり今檢断職といふ是也

けんぶつ　見物とあり事物を觀見するをいふ也〇見佛は奥州松島に住り能州稲津邑に一崑洞あり月の上弦ごとに来て禅坐誦経て其後食を絶ぬ西行法師洞中に問訊聴法し和歌を唱酬し奥の本住もあらはしたりと撰集抄にみえたり

けんぎく　親王已下参議已上諸国の権守を兼るの勘文にみえたり

げんのう　玄翁法師の那須野の殺生石の故事によりて大きなる割をのゝ名とすといふ也天工開物に攻石椎といへるなり〇殺生石は今もふたつにわれて常の石にかはる事なし堂てるがたし又一説に此山の温泉涌出る所に此石の邊をとほる時は鳥獣まれに忽死すともいへり

げんまい　荒政要覧に至冬收到元米といへるなり〇今いふは現米にかり折色に対していふ

けむしろ　氈てふあり毛席の義也青氈白氈錦氈等あるとみえたり

けむくだつ　毛蠹起(ケムクダツ)の義天工開物に紙用礬水湯過則毛茨不起といへるなり

けんどやて　石英をいふ叡舎利の義又冑(カフト)水精ともいへり

けんとや　　劔尺也一名玉尺しいふ凡刀劔佛像門戸等ニ用ふ

金ぐ一尺二寸とハ段とん

げんくゝん　　玄関ハ俱舎論ニふんて家ニまゐる言関也しいふ

警世百首ニ

偽りハまことにあらぬまことつゝとの玄象の関とゝろて出る邪

○言関ハ大臣ゐ〳〵てハ御〳〵ぬ事也向とゐるよう迴〳〵るとの也

〳〵そ琉球の家宅もつゝとゝく

けんぐゝん　　顕官者外記史式部民部丞左右衛門等也

げんぎやゝ　　玄象とゝろ琵琶の名器也撥面ニ玄象とかゝるニ

ゝうて名く紫檀の槽のひさ木也と骨ニ孫抓ニふゝゝり職制律ニ

凡玄象器物とゝふゝ〳〵ハ天文暦術ゐしの器物とゝ也或ハ玄上〳〵

ゝう玄ゝ集ゝてハゝるがみゝゝめり武智麻呂の七世諸葛の子玄

上宰相ゝと延喜帝ゝ飾る故ゝ名くゝもとゝう古事談ゝ貞敏渡唐の

附ニ廉兼武ゝう得ゝる紫檀の琵琶也ゝとゝう貞敏ハ仁明の御宇れ

遣唐准判官藤原貞敏也

△けらんさ　　顕文紗也ゝとゝう又けんのさゝもゝえゝゐり○けらん

ゝゝハ孫氏ゝみも如文綾也ゝとゝう謝霊運ゝ詩ゝ鶴文綾あり

けらゐ　　六月移ニ犯畜罪ゝゝ白古事記ニハ馬婚牛

婚雑婚犬婚ゐゝとゝう○右の文ニ次てハ此罪一ツひてハ事足ゝ

ゐも次ニ犯禽罪ゐゝの義ゝゝやとゝう

△けやう　　日本紀ゝ貴字とゝめゝ

○けらバ　　家の軒ニ入ゝ蝶羽ゝゝゝ羽中ゝて花の用ゐ

とゝ入ゐ

けらゐ　　孫氏ニ文籍も家礼ゝゝゝゝゝ白ゐれ文ゝゝや

まゝゐゐゝとゝう今縉紳家ゝ法ゐゝう拾永准の家礼ゝ孫

もハ其家の礼ゝ用ゝゝゝゝ何也ゝゝとゝう同家ゐゝゝや二家永

と天下の師範ゝ孫もハ三内口決ゝゝて其家ハ内ゝ○業平

卿忠仁公の家礼ゐゝハ時代ゝ古ゝ説也王孫の臣家の礼ゝ学

〇かつて　かつて所也〇今の従者と家来或家礼なと称する

〇もてなし　家礼なり半紙しもや或家隷なとをいふ

げらう　下臈こもり臈の上下をいふ語也

△げんと　外吏也受領してなとの任ふるをいふ

〇けとり　假令の音也

△けろくろん　物ゝ見えなり俗伝かれと今伝きよろくろん

〇以何如　以狀樂觀の義しやや

〇けおり　褐とこもり毛布也と注す

けおろし　源氏ふ毛氣恐ろしきを也

倭訓梨中編巻之七終

国立公文書館
National Archives of Japan